

# 窓辺

病院の未来は  
どうなるか

毛利 博

日本は人口減少社会に入っています。世界一の病床数を有しても、空床状態が恒常化し、民間病院だけでなく公立、公的病院でも経営が圧迫され、医療提供体制に支障をきたす事態になる恐れがあります。県民の健康を守る「最後の砦」が、なくならないようにする工夫が必要です。

将来の病院の機能や在り方を総合的に話し合うことが、国から求められています。2次医療圏で、保健所、病院、医師会、行政などが集まり議論をする場として

「地域医療構想調整会議」が開催されています。病床削減が主な話ですが、右肩上がりの社会に慣れており、なかなか議論が前に進みません。「働き方改革」という新たな課題が出て、医師の労働時間を守りながら患者さんの命を守ることの難しさが現実味を帯びてきます。医療提供を堅持しながら、この改革を進めることには大きな壁があります。

これまでの、あまねく医療が享受できる「医療の均てん化」が推進されてきま

した。しかし、2年後に施行される医師の働き方改革で医療提供体制が大きく変動する可能性があります。県民が医療を平等に受けられるためには、県民の理解を得ながら医療のICT（情報通信技術）化を推進し、「医療の集約化」を行いながら、過疎地域でも医療が享受できる体制を模索する必要がありますのではないのでしょうか。

これまで享受していた医療サービスを、医療が偏在化する状況でも提供できるように、10年、20年先を見据えながら考える時がきています。

（県病院協会 会長）  
藤枝市病院事業管理者